

平成30年6月14日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2017

課題番号：24530839

研究課題名(和文)「離れる-近づく」の視点からみた親子関係の発達に関する研究

研究課題名(英文) Longitudinal study on development of parent-child relationships from the perspectives of physical distance between them

研究代表者

小島 康生 (Kojima, Yasuo)

中京大学・心理学部・教授

研究者番号：40322169

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：幼稚園年少、年中、年長クラスの園児がいる家庭に対し、約3年にわたる追跡調査を行った。最終的に210家庭の縦断データを集めた。

調査内容は以下の通りである。3～6ヵ月に1回、各家庭に調査用紙を郵送し、次のことを記入してもらった。(1) 家に子どもを置いて母親が外出する(留守番)、(2) 母子で外出し、ある場所を基点に、一定時間、母子が別行動をとる、(3) 子どもが母親の同行を伴わずに、外出する

膨大なデータの分析の結果、(1)～(3)のいずれに関しても、子どもの加齢とともに例数が増え、母子の相互自立が進むこと、きょうだい(特に兄弟)の存在が、母子間の安定した身体隔たりを支えていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)： Two-hundred and ten families with 3- to 6-year-old kindergarteners participated in the diary-based study concerning physical distances between the mothers and their children for about 3 years. The prescribed questionnaires were posted to the families and the mothers recorded the following 3 types of episodes for 5 consecutive days; (1) mothers leave their children at home solely or with the other persons, (2) both mothers and their children go out, and thereafter act separately from one another, and (3) the children go out without accompanied by their mothers.

The results indicated that in all of the 3 types of mother-child separation described above, frequencies of the episodes increased during the transition from kindergarten to elementary school. Furthermore, the children with the siblings (especially older siblings) spent more time away from their mothers. The findings suggested mutual independence between parents and children proceed through this period.

研究分野：発達心理学, 家族行動学

キーワード：幼児 小学生 母子 離れる 近づく 外出 発達 自立

1. 研究開始当初の背景

ヒトの子どもは身体的に未熟な状態で生まれ、養育者の手厚い世話と保護を前提に成長・発達を遂げる。しかし、そのいっぽうで、主たる養育者と考えられる母親も、四六時中、子どものそばに寄り添い続けることは不可能で、さまざまなレベルで子どもから離れることが必要となる。子どももまた、いつまでも親の庇護を受け続けるのではなく、やがては親と離れて過ごすことに慣れていく必要がある。それこそが親からの子どもの自立であり、子どもからの親の自立でもある。そうした過程を「親子の相互自立」と位置づけ、縦断的にその経過を確かめること、また相互自立を支える諸要因を明らかにすることが本研究のねらいであった。一言付け加えるなら、そうした観点からの親子関係の発達研究はこれまでなかった。

2. 研究の目的

上述の問題背景をもとに、就学前から小学校にかけて、親子が離れて過ごす局面を以下にあげる3つに分け、それらの事例を縦断的かつ丁寧に拾い上げ、先に述べた親子の相互自立の詳細、また関連要因を明らかにすることが大きな目的であった。

3. 研究の方法

愛知県内の幼稚園10余園に協力を依頼し、在園時の保護者約1,100名に対し、調査用紙を届けた。(1) 母親が子どもを自宅に置いて出かける、(2) 母子で一緒に外出し、屋外のいずれかの場所を基点に母子が別行動をとる、(3) 母親の同行を伴わずに、子どもが外出する、の3つについて、連続5日間の記録を求めた。これを3~6ヵ月ごとに繰り返し、研究期間中に10回分のデータを集めた。調査開始時に3歳だった子どもは小学校1年生に、4歳だった子どもは小学校2年生に、5歳だった子どもは小学校3年生に成長した。最後まで協力してくださった家庭は210家庭であった。

4. 研究成果

上記の(1)、(2)、(3)に関し、3年間の追跡データを全コホートまとめて示したものが、図1~3である。(1)の留守番は、小学校3年生まで緩やかに増加した。なお、兄弟のいる子どものほうが増加が著しかった。

(2)の事例は小学校1年生ごろまで増加し、その後、減少した。(3)は、順調に増加し、特に小学校入学後の増加が著しかった。小学校2年生ごろ以降は、母子での外出自体が少なくなることで、それに関連して、子どもが単独で屋外に出ていくことが増えることが確認された。

母子がそうして離れて過ごしている時に、子どものそばに誰がいるかを分析した結果、当初(年長クラス頃まで)は、父親、祖父母など身近な大人がいることが多かったが、加

齢とともにそれは顕著に減ることが確認された。きょうだいがいる子ども(特に兄弟がいる子ども)は、きょうだいとの留守番やきょうだいでの外出、あるいは友達との外出が多いことが明らかになった。外出先も小学校への入学と共に多様性を増し、習い事、友達の家、学校のグラウンドがたびたび登場した。全体に、きょうだい(特に兄弟)は親子の相互自立の橋渡しの役割を果たしていることが予想された。

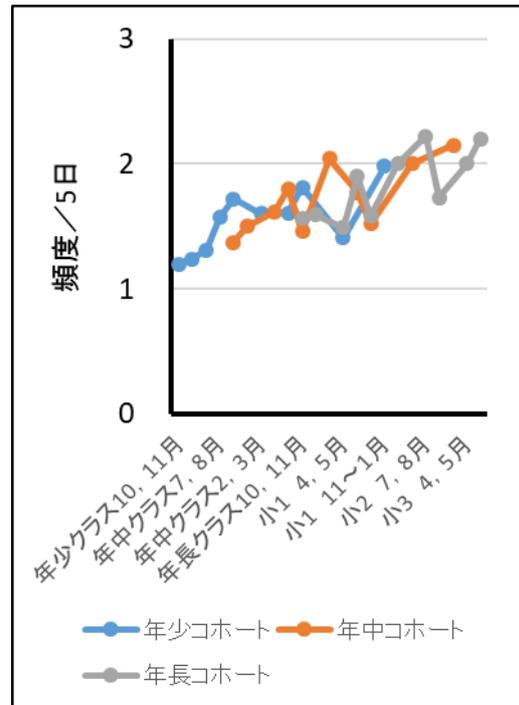


図1. 母親が子どもを置いて外出する事例の変化

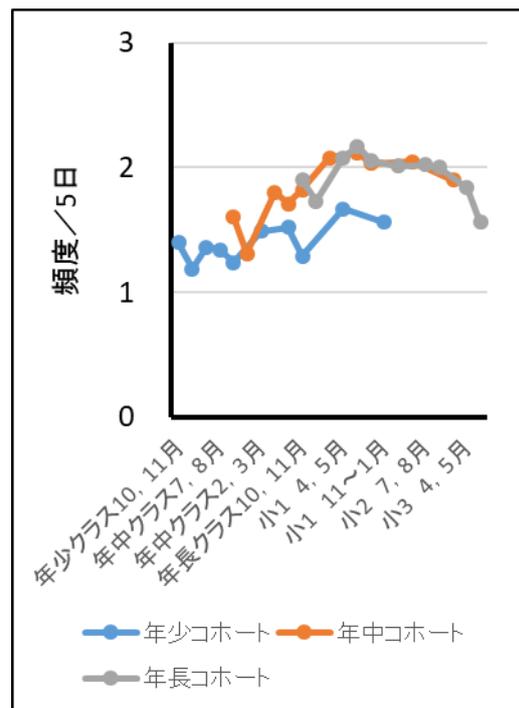


図2. 母子が屋外で別行動をとった事例の変化

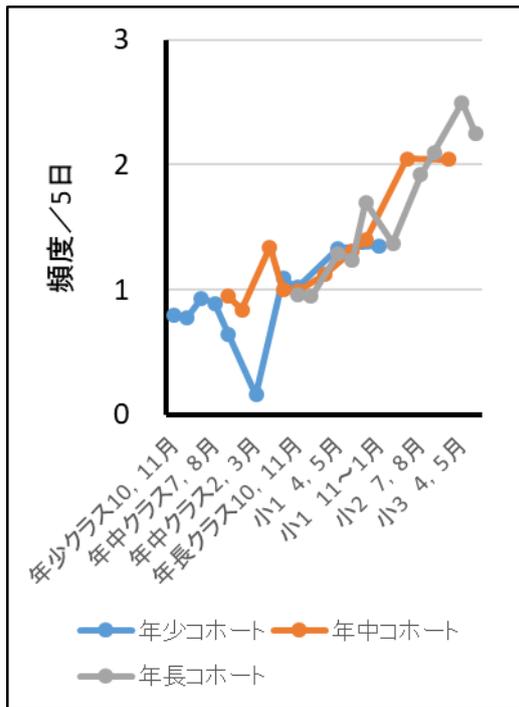


図 3. 母親の同行を伴わずに、子どもが外出した事例の変化

就学前から小学校にかけて、親子が離れて（しかも家の中、外というレベルにおいて）過ごすことがどのように増えていくのか、またその実現を支える要因として何が考えられるのかを扱った実証研究はこれまでなかった。海外ではそもそも、治安の問題もあって、親子が離れることは基本的に許されず、例えば、子どもが留守番しているのが見つかったら、警察に通報がされるといった事情がある。だが日本では、治安が安定していることもあり、留守番は比較的一般的で、子どもが一人で外に出歩くことへの許容性も高い。今後は、こうした日本の特殊性や海外との比較も通して、親子関係の発達理解に新たな視点を取り入れた研究に取り組みたいと考える。

また昨今は、親子の相互自立を支えるさまざまな媒体（たとえば、キッズ携帯の利用や自転車の運転といったこと）が増えている。それらの普及が親子の行動にどのように影響するかといった問題にも取り組みたい。

なお現在は、今回の研究協力者に対し、さらに3年間の追跡を依頼し、データの収集を継続している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0件）

※ ただし、審査中の論文が1件。

〔学会発表〕（計6件）

1. Kojima, Y. Going-out behaviors of young children without their mothers: Longitudinal study from preschool to

elementary school International Congress of Psychology (国際心理学会), パシフィコ横浜, 2016年

2. 小島康生 幼稚園年長クラスから就学後にかけての子どもの外出行動の変化 (日本発達心理学会第27回大会), 北海道大学, 2016年
3. 小島康生 就学前の子どもによる母親と離れての外出の様相 (日本心理学会第79回大会), 名古屋国際会議場, 2015年
4. 小島康生 屋外で母子が別行動をとることに関連する要因 (日本発達心理学会第26回大会), 東京大学, 2015年
東京大学
5. 小島康生 留守番をめぐる母子の「離れる-近づく」の発達の様相 (日本心理学会第78回大会), 同志社大学, 2014年
6. 小島康生 日誌法による母子間の「離れる-近づく」の様態に関する研究 (日本心理学会第77回大会), 北海道医療大学, 2013年

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

なし

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小島 康生 (KOJIMA, Yasuo)

中京大学・心理学部・教授

研究者番号：40322169

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号 :

(4) 研究協力者
なし ()